

広吉の霊

私は霊的研究と治病の実験を伴せ行はふとした最初の頃である。それは十九歳になる肺患三期の娘を浄霊した。二回の浄霊で些か効果が見え第三回目の時であつた。私が浄霊にかかるのと側に見てゐた娘の母親であるM夫人（五十歳位）が突然起上つて中腰になり、その形相物凄く、今將に私に掴みかからん氣勢を示し「貴様は……貴様はよくも俺が殺そうとした娘をもう一息といふ所へ横合から出て助けやがったな。俺は腹が立つて堪らねへから貴様をヒドイ目に合はしてやる」といふのである。勿論男の声色で私は吃驚した。私は「一体あなたは何誰です、まあまあ落着いて下さい。」と宥めた処、彼は不承無承に座り曰く、

彼「俺は広吉といふ者だ」

私「一体貴方は此肉体とどういふ関係なのですか？」

彼「俺は此家の四代前の先祖の弟で広吉といふものだ。」

私「では、あなたは何が為に此娘に憑いて取殺そうとしたのですか？」

彼「俺は家出をして死んだ無縁の者だが誰もかまって呉れない。だから祀って貰ひたいと今迄此家の奴等に気を付かせようと病気にしたり種々の事をするが一人も気の付く奴がない。癪に触って堪らないから此娘を殺すのだ。そうしたら気がつくだらう。」

私「併し貴方は地獄から出て来たのでせう。」

彼「そうだ俺は永く地獄に居たが、もう地獄は嫌になったから祀ってもらひたいのだ。」

私「然しあなたは此娘を取殺したら今迄よりもモツと酷い地獄へ落ちるが承知ですか？」と言った処、彼は少々驚いて、

彼「それは本当か？」

私「本当どころか、私は神様の仕事をしてゐるものだ。嘘は決していへない。又貴方を必ず祀て上げる。」

と種々説得した処、彼も漸く納得し共に協力して娘の病氣を治す事になった。彼の挙動及び言語は江戸ツ子的で氣持の良い男であつた。幕末頃の市井の一町人であらう。そうしてM夫人は神憑り中無我で些かの自己意識もない、実に理想的靈媒であつた。其後娘の病氣は順調に治癒に向ひつゝあつたが、或日突然M夫人が訪ねて来た。

「私は二三日前から何か靈が憑るやうな氣がしますから一度調べてもらひたい。」

といふので、早速私は靈査法を行った。先づ夫人が端座瞑目するや、私は先づ祝詞を奏上した。夫人は無我の状態に陥つたので質ねた。

私「貴女は誰方です。」

M「此方は神じゃ。」

私「何神様ですか。」

M「此方は魔を払ふ神じゃが名前は言へない。」

私は思った。（予て神にも真物と贋物があるから氣を付けなくてはいけないといふ事を聞いてゐたから、或は贋神かも知れない。騙されてはならない。）——と警戒しつつ質ねた。

私「あなたは何の為にお出になりましたか？」

M「其方が治してゐる娘は今魔が狙つてゐるから、その魔を払ふ事を教へてやる。」

私「それは如何すればよいのですか？」

M「毎朝、艮の方角へ向つて塩を撒き、祝詞を奏上すればよい。」
私は他の事を質いたが、それには触れず、

「それだけ知らせればよい。」と言つてお歸りになった。M夫人は覚醒し驚いた風で私に聞くのである。

M「先生御覧になりましたか？」私は

「何をですか、別に何にも見えませんでした。」と言ふと夫人、
「初め先生が祝詞をお奏げになると後の方からゴーツと物凄い音がしたかと思ふと、いきなり私の脇へお座りになった方がある。見る

と非常に大きく座つてをられて頭が鴨居まで届き、お顔ははつきりしませんでしたが、黒髪を後へ垂らし鉢巻きをなされてをり御召物は木の葉を細く編んだもので、其が五色の色にキラキラ光りとても美しく見えたのです。間もなく私に御憑りになったかと思ふと、何にも分らなくなりました。」

との事で私は之は本当の神様に違ひないと思ひ、其後查べた所、国常立尊といふ神様である事が判つた。其事があつてから二、三日後、M夫人は復訪ねて来た。「又何か憑りそうな気がしますから御查べ願ひたい。」と言ふので早速靈査に取かかると今度は前とは全然異ふ。私は、

「何者か？」と訊くと、

「小田原道了権現の眷族である。」と言ふので、

「何の為に憑つたのか？」と訊くと、

「お詫びをしたい」と言ふのである。

「それはどういふ訳か？」

「実は此婦人は道了権現の信者であるが、今度娘が荒神様の御力で助けられたので腹が立ち、邪魔してやらうと思った。所がそれを見顯はされて申訳がない。」と言ふのである。

そう言ひ終るや夫人は横様に倒れた。瞑目のまゝ呼吸せはしく唸つてをったが五分位で眼を睜き、

「アゝ驚いた。最初黒い物が私の身体に入つたかと思ふと、又誰かが来て最初の黒い物を鞭のやうな物で打擲すると、黒い物は逃げて行つた。」

といふので私は―「二、三日前の神様の警告された魔といふのはこれだな。」と惟つた。それから娘の病氣は日一日と快くなり、遂に全快したのである。仍で私も広吉の霊を祀つてやった。これより先或時広吉の霊が夫人に憑つて曰く、「自分はお蔭様で近頃は地獄の上の方に居る様に成り大きに樂になった。」と言つて厚く礼を舒べ、次いで「お願いがある。」といひ「それは毎朝私の家の台所の

流しの隅へ御飯を三粒、お猪口にでも入れていただきたい。」といふのでその理由を訊くと、彼は、

「靈界では一日飯粒三つで充分である。又自分は台所より先へは未だ行けない地位にある。」と言ふ。

其後暫くして彼は、「梯子の下まで行ける様になった。」と言つた。それは其頃私の家では二階に神様を祀つてあつたからで、其後「神様の次の部屋まで来られる様に成つた。」と言ふので私は、

「モウよかろう。」と祀つてやつた。それから二、三日経つて私が事務所で仕事をしてゐると私に憑依したものがある。而も嬉しくて涙が溢れるやうな感じなのだ。直ちに人氣のない部屋に行き、憑依靈に訊いた処、広吉の靈であつた。彼曰く、

「私は今日御礼に参りました。私がどんなに嬉しいかといふ事はよくお解りでせう。」といひ又「別にお願ひがある。」と言ふのである。

「何か？」と訊くと、

「それは今度祀って戴いてから実に結構で、何時迄も此の儘の境遇でありたいのです。娑婆はモウ凝りごりです。娑婆では稼がなければ食ふ事が出来ず、苦しみばかり多くて実に嫌です。再び娑婆へ生れないようどうか神様へお願いして戴きたい。」

と言ひ終つて厚く礼を述べ歸つた。之に依て察すると死ぬ事は満更悪い事ではなく、靈界往きも亦かなりと言ふべきである。そうして靈界に於ては礼儀が正しく助けた靈は必ず礼に来る。其手段として人の手を通じて物質で礼をする事もある。よく思ひがけない所から欲しいものが来たり貰つたりする事があるがそういう意味である。M夫人は理想的靈媒で尠からぬ收穫を私に与へたが、斯ういふ事もあつた。或時嬰兒の靈が憑つた。全く嬰兒そのまゝの泣声を出し、その動作もそうである。私は種々質ねたが、嬰兒の事とて語る事が出来ない。やむを得ず「文字で書け。」と言つた処、拇指で畳へ平仮名で書いた。それによつてみると「生まれるや間もなく簀巻にされて川へ放り込まれ溺死し、今日迄無縁になつてゐたので祭つてく

れ。」といふので私が諾ふと欣んで去った。右の文字は靈界の誰かが嬰兒の手を取って書かしたものであらう。又或時憑依靈へ対し何遍聞いても更に口を切らない。種々の方法を以て漸く知り得たが、それは松の木の霊で、その前日その家の主人が某省官吏でその庭にあつた松の木の枝を切って持ちかへり、神様へ供へたのであつたが、その松に憑依してゐた霊で、彼の要求は「人の踏まない地面へ埋めて祝詞を奏げてもらひたい。」といふのでその通りにしてやつた。